

中学生の子どもをもつ両親とその子どもの会話に関する調査

河内 浩美¹⁾ 渡邊 典子¹⁾ 小柳 恭子²⁾ 久保田 美雪¹⁾

1) 新潟青陵大学看護学科

2) にいがた思春期研究会

The Investigation About the Conversation of Parents with Junior High-School Students and Their Child

Hiromi Kawauchi¹⁾ Noriko Watanabe¹⁾ Kyoko Oyanagi²⁾ Miyuki Kubota¹⁾

1) Department of nursing Niigata Seiryō University

2) Adolescence in Niigata

Abstract

Behaviors of adolescent children concerning sex have been remarked. It is said that the conversation at home is important as one of the ways for the resolution. Then, we carried out unsigned questionnaire at the seminar concerning sex for parents (attendee and his wife or husband, total 346) that was held at one junior high school in A prefecture. The object of the analysis is the 148 parents who answered validly. We investigate the object by dividing it into two groups (conversation group and no-conversation group.)

The result shows that conversation group (C-G) is 73 (10 fathers and 63 mothers), and no-conversation group (NC-G) is 73 (22 fathers and 51 mothers). 57 of C-G (78.1%) and 35 of NC-G (47.9%) have talked with children about body and mind. The percentage of C-G is significantly high. 47 of C-G (64.4%) and 48 of NC-G (65.8%) have worried about children's body and mind.

Key words

Adolescence Parents Conversation

要 旨

思春期にある子ども達の性に関わる行動が問題視されている。その解決策のひとつとして家庭における会話が重要であるといわれている。そこで、A県内の中学校で実施された親への性に関する出前講座への参加者およびその配偶者346人に無記名自記式質問紙調査を実施した。そのうち有効回答を得られた中学生の子どもを持つ親148人を分析対象とし、会話あり群と会話なし群に分け比較検討した。

結果は、会話あり群の73人(父親10人、母親63人)、会話なし群73人(父親22人、母親51人)であった。子どもから体や心の相談があったとしたのは、会話あり群73人中57人(78.1%)、会話なし群73人中35人(47.9%)であり、会話あり群の方が有意に高かった。子どもの体や心について気になったり悩んだりしたことがあるとしたのは、会話あり群73人中47人(64.4%)、会話なし群73人中48人(65.8%)であった。

キーワード

思春期 親 会話

はじめに

1999年に実施された「青少年の性行動全国調査」¹⁾において、青少年の性行動の早期化および低年齢化が注目された。それに伴い、思春期にある子ども達の望まない妊娠や人工妊娠中絶、性感染症の増加、性暴力やドメスティック・バイオレンスなど性に関する問題が危惧されている。その背景には、氾濫する性情報や正しい性知識をもたない無防備な状態で性行動が行われている現状がある。

その対応策として、性は生きる性としてとらえることができるような性教育の重要性が高まっている。しかし、性教育を担う学校教育では学校教育全体の時間短縮傾向の中で子どもの成長発達段階に合わせた教育の実施は難しい状況もあり、性の身体的・生理的な内容に重きを置かざるを得ないのが現状である。また、一方で子どもたちの性の情報源は、学校教育の中では得られない側面について、さまざまな研究からも「友人」「まんが・コミックス」「テレビ」などである。しかし、これらは営利を目的に製作される場合が多く必ずしも正しい知識を得られる機会とは言い難い。

子ども達の性に関わる行動が問題視される中、その解決策のひとつとして親子関係の重要性や家庭における性教育が見直されるようになってきている。そこで、本研究は親子間の会話の現状を明らかにする目的で、「親子

間における会話の頻度と内容」「子どもからの相談とその内容」「親がもつ子どもについての悩みとその内容」「『性』についての会話」について調査を実施したので報告する。

研究方法

1. 対象および期間

調査期間は、2004年10月より2006年5月であった。調査対象は、A県内の小・中学校で実施された「親への性教育出前講座」、小・中学校PTA総会で研究協力の承諾を得られた親とその配偶者346人を対象とし実施した。回答は、162人(回収率46.8%)から得られ、中学生の子どもを持つ親148人(有効回答率91.4%)を分析対象とした。

2. 調査内容・分析方法

調査内容は、対象者の属性、会話の頻度とその内容 子どもからの相談の有無とその内容 子どもについての悩みの有無とその内容 『性』についての話の有無と内容である。なお、「子どもからの相談内容」および「子どもについての悩みの内容」については、「体のことについて」「日常生活について」「心のことについて」「性のことについて」の大項目を40個の小項目に分け該当する内容を選択してもらい、その結果について大項目別に検討した。(表1)

表1 子どもからの相談および悩みの内容

大項目	小項目									
体のことについて	身長 勃起	体重 射精	スタイル マスターベーション	乳房	体毛	体臭	陰毛	にきび	性器	月経
日常生活について	食事 金銭	睡眠 健康	起床 病気	服装	勉強・進学	異性の友人関係	同姓の友人関係	担任		
心のことについて	物事に集中できない すぐにむかつく		イライラする 悲しくなる	毎日が楽しくない 一人ぼっちだと感じる	両親いうことが素直にきけない 寂しい					
性のことについて	男女関係	性行動	避妊	妊娠	性感染症	出会い系サイト	援助交際	性欲		

分析方法は、会話の頻度について、子どもとの会話において、それぞれ10項目（学校生活、異性の友人関係、同性の友人関係、進学や将来、異性関係、ファッション、芸能人、趣味、健康、性）の会話内容について「よく話す」「時々話す」「あまり話さない」「全く話さない」に該当するものを選択してもらい「よく話す」から「全く話さない」を4段階にわけ点数化し集計を行った。集計結果より、10項目の会話内容における平均得点から全体の平均得点より得点の高いものを「会話あり群」、低いものを「会話なし群」とした。

会話の頻度とその内容における得点についてはMann-WhitneyのU検定を行い、会話の頻度と調査内容については χ^2 検定を行った。また、会話あり群の父親・母親別についても同様の検定を行った。

3. 調査方法

調査は、無記名自記式質問紙を会場で配布し、その場で回収または郵送にて回収した。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究者が調査の目的について文書と口頭で説明をおこなった。調査について、質問紙は無記名であること、データは統計処理を行うこと、調査結果は学会などで発表する予定があること、研究以外に使用しないことを明示した。対象者の同意は、質問紙の回収をもって得られたこととした。

結果

1. 対象者の属性

回答者は、父親33人（22.3%）、母親115人（77.7%）であった。年齢は30歳代17人（11.5%）、40歳代118人（79.7%）、50歳代10人（6.8%）、不明3人（2.0%）であった。

会話の頻度について、会話内容の10項目全体における平均得点は、会話あり群3.0点、会話なし群は2.2点であった。会話あり群73人のうち、父親10人（13.7%）母親63人（86.3%）、会話なし群73人のうち、父親22人（30.1%）母親51人（69.9%）であった。また、親別では父親33人のうち、会話あり群10人（30.3%）

会話なし群22人（66.7%）、母親115人のうち、会話あり群63人（54.8%）、会話なし群51人（44.3%）であった。（表2）

表2 対象者の属性

	全体 n=148		父親 n=33人22.3%		母親 n=115人77.7%	
	n	%	n	%	n	%
平均年齢	43.52歳		45.45歳		42.95歳	
	SD±3.86		SD±3.52		SD±3.78	
30歳代	17	11.5	1	3.0	16	13.9
40歳代	118	79.7	29	87.9	89	77.4
50歳代	10	6.8	3	9.1	7	6.1
不明	3	2.0	0	0.0	3	2.6
配偶者の有無						
あり	140	94.6	32	97.0	108	93.9
なし	4	2.7	0	0.0	4	3.5
不明	4	2.7	1	3.0	3	2.6
会話の頻度						
会話あり群	73	49.3	10	30.3	63	54.8
会話なし群	73	49.3	22	66.7	51	44.3
無回答	2	1.4	1	3.0	1	0.4

会話の頻度と会話内容の10項目におけるそれぞれの平均得点は、会話あり群で「学校生活」3.6点、「同性の友人関係」3.5点、「趣味」「健康」3.3点の順に高く、「性」2.3点、「異性関係」2.4点と低かった。会話なし群で「学校生活」「同性の友人関係」2.8点、「進学や将来」2.7点、「趣味」「健康」2.6点の順に高く、「異性関係」「性」1.4点と低かった。会話内容すべての項目について会話あり群の平均得点は、会話なし群に比べ有意に高かった。（図1）また、会話あり群における父親・母親別では、会話内容の10項目全体の平均得点は3.0点、母親の平均得点は3.1点であった。10項目それぞれの平均得点は、父親で「学校生活」3.6点、「同性の友人関係」3.5点、「趣味」3.3点の順に高く、「性」1.9点と低く、母親で「学校生活」3.6点、「同性の友人関係」3.5点、「趣味」「健康」3.3点の順に高く、「異性関係」「性」2.4点と低かった。（表3）

なお、以降の結果については、調査項目子どもからの相談の有無とその内容「子どもについての悩みの有無とその内容」「性」についての話の有無と内容について会話あり

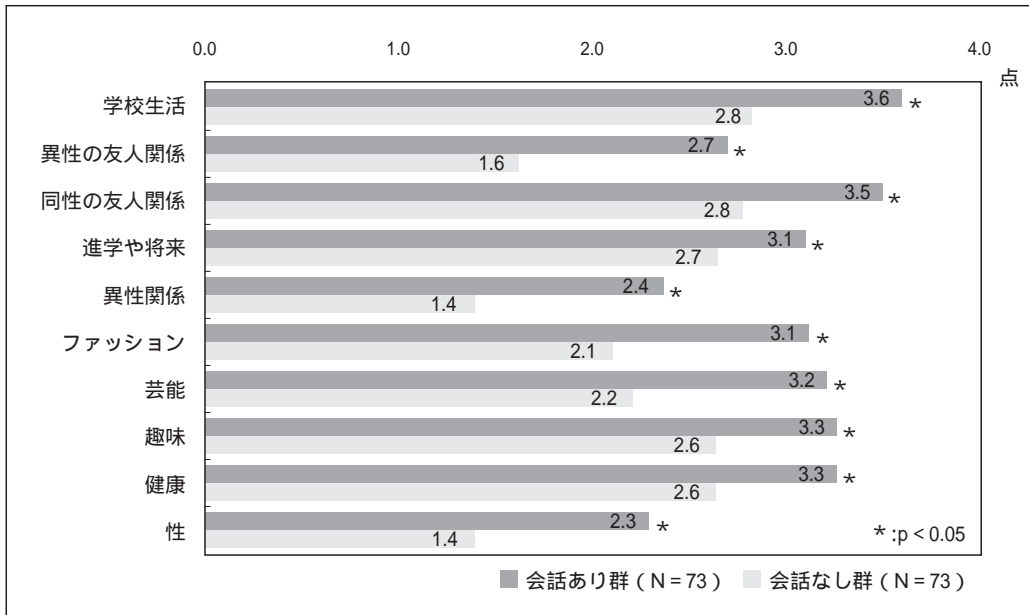


図 1 会話の頻度と会話内容における平均得点

表 3 会話あり群における親別での会話の内容 (N = 73)

会話の内容	会話あり群		
	父親 n=10	母親 n=63	
平均得点	3.0	3.1	n.s
学校生活	3.6	3.6	n.s
異性の友人関係	3.0	2.7	n.s
同性の友人関係	3.5	3.5	n.s
進学や将来	3.1	3.1	n.s
異性関係	2.5	2.4	n.s
ファッション	2.9	3.2	n.s
芸能	3.1	3.2	n.s
趣味	3.3	3.3	n.s
健康	3.1	3.3	n.s
性	1.9	2.4	n.s

*: p < 0.05 n.s: not significant

群、会話なし群での検討、また会話あり群の父親・母親別にみた検討内容について述べる。

2. 会話の頻度と子どもからの相談

子どもからの相談について、子どもから何かしらの相談があったとしたのは、会話あり群57人(72.6%)、会話なし群35人(47.9%)であり会話あり群の方が有意に高かった。

また、相談を受けた内容については、「体

について」会話あり群53人(72.6%)、会話なし群29人(39.7%)、「日常生活について」会話あり群52人(71.2%)、会話なし群30人(41.1%)、「心について」会話あり群30人(41.1%)、会話なし群(16.4%)、「性について」会話あり群13人(17.8%)、会話なし群3人(4.1%)であり、全ての項目について会話あり群の方が有意に高かった。(図2)

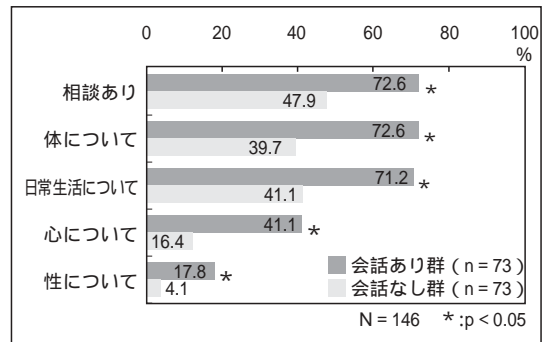


図 2 会話の頻度と子どもからの相談について

会話あり群の父親・母親別で、子どもから何かしら相談があったとしたのは、父親7人(70%)、母親50人(79.4%)であった。相談を受けた内容については、「体について」父親6人(60.0%)、母親47人(74.6%)、「日常生活について」父親6人(60.0%)、母親46人(73.0%)

「心について」母親30人(47.6%)、「性について」父親1人(10.0%) 母親12人(19.0%)であった。「心について」の相談では有意差が見られた。(表4)

表4 会話あり群における親別での相談や悩み (N=73)

	会話あり群				
	父親 n=10		母親 n=63		
	n	%	n	%	
子どもからの相談					
相談があり	7	70.0	50	79.4	n.s
体について	6	60.0	47	74.6	n.s
日常生活について	6	60.0	46	73.0	n.s
心について	0	0.0	30	47.6	*
性について	1	10.0	12	19.0	n.s
子どもについての悩み					
悩みあり	7	70.0	40	63.5	n.s
体について	1	10.0	22	34.9	n.s
日常生活について	4	40.0	31	49.2	n.s
心について	5	50.0	12	19.0	*
性について	0	0.0	2	3.2	n.s

*:p<0.05 n.s:not significant

3. 会話の頻度と子どもについての悩み

子どもの悩みについて、気になったり、悩んだりしているとしたのは、会話あり群47人(64.4%) 会話なし群48人(65.8%)であり両群ともに6割を超えていた。

また、悩みの内容では、両群ともに「日常生活について」がもっとも多く、会話あり群35人(48.0%)、会話なし群33人(45.2%)でありほぼ半数を占めていた。次いで「体について」が多く、会話あり群23人(31.5%) 会話なし群22人(30.1%)であり両群ともにほぼ同じ割合であった。「性について」は、会話あり群2人(2.7%)、会話なし群11人(15.1%)であり会話なし群の方が有意に高かった。(図3)

会話あり群の父親・母親別で、子どもについて気になったり、悩んだりしているとしたのは、父親7人(70.0%) 母親40人(63.5%)であった。悩みの内容については、父親で「心について」5人(50.0%)、「日常生活について」4人(40.0%)、「体について」1人

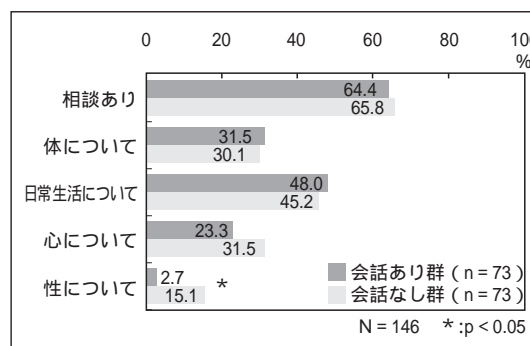


図3 会話の頻度と子どもについての悩み

(10.0%)の順に高く、「性について」は0人であった。母親では「日常生活について」31人(49.2%)、「体について」22人(34.9%)、「心について」12人(19.0%)、「性について」2人(3.2%)の順に高かった。「心について」の悩みでは有意差が見られた。(表4)

4. 『性』についての話の有無と内容

(表5、6)

『性』についての話について、子どもと『性』について何かしらの話をしたことがあるのは、会話あり群66人(90.4%)、会話なし群41人(56.2%)であり会話あり群の方が有意に高かった。会話あり群の父親・母親別では、父親8人(80.0%)、母親58人(92.1%)であった。

『性』について話をしていた内容について、会話頻度別の会話あり群、会話なし群ともに「二次性徴」「月経」「生命誕生」「男女の心理行動の違い」「異性との交際仕方」の順に高かった。また、これら5項目については、会話あり群の方が有意に高かった。また、『性』についてあまり話がされていなかった内容について、話をした割合が全体の10%未満であったのは「エイズ」「性器のつくりと働き」「避妊」「思春期の心理」「愛とは何か」「精通」「性交」「性感染症」「性の人生における意味」「性欲の処理の仕方」であった。

『性』について話をしていた内容について、会話あり群の父親・母親別では、父親「男女の役割」「二次性徴」「男女の心理行動の違い」「エイズ」「避妊」の順に高く、「性器のつくりと働き」「精通」「性交」「性感染症」「性の人生における意味」「性欲の処理の仕方」に

表5 性についての話の有無と内容

(N = 146)

	全 体 n=146		会話あり群 n=73		会話なし群 n=73		
	n	%	n	%	n	%	
話したことある	107	73.3	66	90.4	41	56.2	*
二次性徴	66	45.2	44	60.3	22	30.1	*
月経	47	32.2	36	49.3	11	15.1	*
生命誕生(受精・妊娠・出産)	37	25.3	28	38.4	9	12.3	*
男女の心理行動の違い	18	12.3	13	17.8	5	6.8	*
異性との交際仕方	16	11.0	12	16.4	4	5.5	*
男女の役割	15	10.3	9	12.3	6	8.2	n.s
エイズ	14	9.6	9	12.3	5	6.8	n.s
性器のつくりと働き	9	6.2	5	6.8	4	5.5	n.s
避妊	8	5.7	7	9.6	1	1.4	n.s
思春期の心理	7	4.8	6	8.2	1	1.4	n.s
愛とは何か	7	4.8	6	8.2	1	1.4	n.s
精通	6	4.1	5	6.8	1	1.4	n.s
性交	4	2.3	4	5.5	0	0	n.s
性感染症	3	2.1	3	4.1	0	0	n.s
性の人生における意味	2	1.4	1	1.4	1	1.4	n.s
性欲の処理の仕方	0	0	0	0	0	0	n.s

*:p < 0.05 n.s: not significant

表6 会話あり群における親別での性についての話
(N = 73)

	会話あり群				
	父 親 n=10		母 親 n=63		
	n	%	n	%	
話したことある	8	80.0	58	92.1	n.s
二次性徴	2	20.0	42	66.7	*
月経	1	10.0	35	55.6	*
生命誕生	1	10.0	27	42.9	n.s
男女の心理行動の違い	2	20.0	11	17.5	n.s
異性との交際仕方	1	10.0	11	17.5	n.s
男女の役割	4	40.0	5	7.9	*
エイズ	2	20.0	7	11.1	n.s
性器のつくりと働き	0	0.0	5	7.9	n.s
避妊	2	20.0	5	7.9	n.s
思春期の心理	1	10.0	5	7.9	n.s
愛とは何か	1	10.0	5	7.9	n.s
精通	0	0.0	5	7.9	n.s
性交	0	0.0	4	6.3	n.s
性感染症	0	0.0	3	4.8	n.s
性の人生における意味	0	0.0	1	1.6	n.s
性欲の処理の仕方	0	0.0	0	0.0	n.s

*:p < 0.05 n.s: not significant

については話をしていなかった。母親は「二次性徴」「月経」「生命誕生」の順に高く、「性欲の処理の仕方」については話をしていなかった。また、「二次性徴」「月経」「男女の役割」については有意差が見られた。

考察

1. 会話の頻度とその内容について

会話の頻度について、父親全体における会話あり群は30.3%であり、母親全体における会話あり群は54.8%という結果であった。会話頻度を項目別にみると、会話あり群・なし群ともに、「学校生活」「同性の友人関係」「趣味」「健康」についてはよく話をしており、会話あり群では会話なし群に比べより多く話をしていった。一方、それぞれの群で「性」「異性関係」については、あまり話をしていなかった。会話あり群については、母親の方がより多く会話をしていた。その内容については、父親・母親ともに同様の傾向をしめしていたことより、子どもと多く会話をしている親は「学校生活」「同性の友人関係」「趣

味」「健康」についてよく話をしており、さらに母親の方が多く会話をしていた。日本家族計画協会が行った調査では、普段の子どもと話しをする頻度について、45歳以上の父親で「よく話をする」60.2%、「時々、話をする」32.3%、40～44歳の母親で「よく話しをする」76.0%、「時々、話をする」21.6%であり、父親母親ともに9割以上が話をしているという結果がある。また、本問の調査で、会話における性差として家庭での性教育は主に母親が行い、父親は消極的な姿勢であるとしている。本調査では、10項目における会話の頻度であり、その中に「性」に関する内容も含まれているため、会話あり群における父親の割合は低くなったと考えられる。

子どもとの会話について、日常生活において直接目にすることが容易な内容については話をする傾向がみられるが、「性」に関連する内容についてはあまり話しをしていない傾向がみられた。その背景には、日々の生活の中で子どもと会話をしようとする親の姿勢がうかがいしることができる。しかし、「性」に関連する内容について話をする事は、普段会話をしているからとしても「性」に対し「恥ずかしい」といった思いも考えられ抵抗を感じていると推測される。

2. 会話の頻度と子どもからの相談について

子どもからの相談について、子どもから何かしらの相談を受けていたのは、会話あり群で72.6%、会話なし群で47.9%であった。日ごろより子どもとよく話をする親は、あまり話をしていない親に比べ、子どもからの相談を多く受けていた。子どもとよく話をする事は、子どもからの相談を受ける機会を増やすと考えられる。

子どもから相談を受けた内容について、会話あり群で「体について」72.6%、「日常生活について」71.2%であり、会話なし群で「体について」39.7%、「日常生活について」41.1%であった。会話あり群と会話なし群において、この2項目は受けた相談内容の多くを占めており、その割合については、会話あり群の方がより多く相談を受けていた。また、会話あり群の父親・母親別についても有意差

はなく同様によく相談を受けていた。「体について」や「日常生活について」は、親が子どもとよく話をしていた内容であり、普段の会話から相談へとつながっていることが推察される。

「心について」「性について」は、相談を受けた割合が低くなり、「性について」は会話あり群17.8%、会話なし群4.1%であった。「性について」の小項目は、「男女交際」「性行動」「避妊」「妊娠」「性感染症」などであり、性教育内容の分類の性行為に関わる側面および心理的側面にあたる内容である。「体について」の小項目には、「乳房」「陰毛」「性器」「月経」「勃起」「射精」など、性教育内容の分類の生理学的側面の内容が多く含まれている。『性』に関連した内容で、中でも親が相談を多く受けた生理学的側面については、学校教育で実施されている性教育の主な内容である。また、思春期では二次性徴が出現する時期でもあり体の成長として子どもにとって相談しやすく、親にとって性教育により得た知識をもとに相談を受けやすい状況が考えられる。思春期の子どもが持つ『性』に関連した悩みは、生理学的側面に限らず、性行為に関わる側面および心理学的側面においても持っており、その相談相手については、子どもの性差があるものの親や友人がその多くを占めているとされており、本調査においても、学校教育の中で受けた生理学的側面については、多くの子どもが親に相談をしていると同様の結果であった。性行為に関する側面および心理的側面については、子どもにとっても恥ずかしと感じたり、聞きづらいことなどが考えられ、相談を受けた親は少ない結果であった。たとえ、子どもから相談があったとしても、親の知識が十分とも言いがたく十分な返答ができるとは考え難い。「性について」は、子どもから相談があった場合に、十分な知識をもたないとされる性行為に関する側面および心理学的側面についても正確な知識をもとに返答ができるよう知識を習得できるような支援が必要と考えられる。

また、会話あり群の中で「心について」相談を受けたのは、母親で30人(47.6%)と約半数を占めたのに対し、父親では相談を受け

ていなかった。心理面について互いに理解を深めるためには、ある程度の時間が必要であり、本調査では、実際の会話時間を調査しておらず明らかではないが、父親と家族との会話時間が減少傾向にあることやより母親の方が子どもとの会話時間がとれる機会があることから、「心について」の相談は母親の方がより多く受けていたと推測される。

3. 会話の頻度と子どもについての悩みについて

子どもについて気になったり、悩んだりしているとしたのは、会話あり群で64.4%、会話なし群で65.8%であった。子どもとの会話の頻度に関わりなく、半数以上の親が子どもについて何かしら気になったり、悩んだりしていた。

子どもについての悩みは、会話の頻度に関らず「日常生活について」は半数近くが、また「体について」は3割の親が悩みがあるとしていた。「心について」と「性について」では、悩みがあったとした親の割合は、あまり会話をしない親の方が高く、特に「性について」は会話をあまりしない親ほど悩みを持っていた。「性について」の悩みは、互いに話し難い内容でもあり、相談を受けたとしても生理的側面の内容に留まりやすい。また、「心について」では会話あり群の父親は、子どもから相談を受けておらず、悩みについても母親に比べより多く悩みがあるとしていた。「心について」は、日常生活をおくる中で直接的に目にできるものではなく、子どもの心を十分にとらえられないことが悩みを持つことへの要因と推測される。

以上のことから、日ごろからあまり会話をしない内容について悩みを持ちやすく、あまり会話をしない親ほどより悩みをもっていることが明らかとなった。親と子のコミュニケーション・スキル¹⁰⁾のひとつとして、子どもの話を意識を集中することがあげられており、話を聴く心構えとして（仕事の）手を休めて話を聴く 子どもの顔をちゃんと見る 話をさえぎらない 子どもの話し方や顔の表現などにも注目する 相槌をうちながら聴く 子どもの話を繰り返したり、簡単に言い

換えて確認しながら聴く 話が途切れたら、話を続けるように促すことをあげている。日ごろから子どもとの会話においては、ただ話を聞くだけではなく「聴く」姿勢をもつことで、子どもとの会話を増やす機会ともなり、より多くの会話をもつことで悩みの解消となると推察される。今後は、親のもつ悩みへの対応として、悩みの内容によっては親子間の会話状況も考慮した支援への取り組みが課題であるといえる。

4. 『性』についての話の有無と内容について

子どもと『性』について何かしら話をしたことがあるとしたのは、会話あり群で90.4%、会話なし群で56.2%であり、日ごろからよく会話をする親ほど、『性』についても話していた。石沢らの調査²⁾では、7割以上の家庭で性についての話はほとんどされていなかったとされているが、本調査の対象者が親への性に関する出前講座の参加者およびその配偶者であることから、子どもの『性』について意識が高いと考えられ、家庭での性教育へ消極的とされる父親においても、『性』について話をしている割合が半数と多い結果となったのではないかと推察される。

『性』について話していた内容について、「二次性徴」「月経」「生命誕生」の順によく話をしており、また、日ごろからよく話をする親、特に母親についてはよく話していた。一方、『性』について話がされていなかった内容は、「性欲の処理の仕方」であった。これらの内容は、性教育内容の分類¹⁾の性行為に関する側面および心理的側面にあたる内容であり、学校教育であまり実施されていない内容に一致する。親のもつ性知識について、森田らは¹¹⁾「性感染症」「避妊法」などについては子どもに持っていてほしい知識としつつも、知識が乏しい現状があることを指摘しているが、親へ性教育講演によりそれらの知識は「説明ができる」となるまでに至っている。このように、親の性行為に関する側面および心理学的側面について十分とは言い難く、本調査でも子どもへ話す内容としても少ない結果となったと考えられる。親が『性』についてあまり話しをしていなかった内容でも、会話

あり群における母親は少数ながらも話をしていた結果から、親への性に関する出前講座のような支援は、父親・母親ともに『性』について親自身の知識の習得により性教育内容の全般について話をする機会の拡大につながる事が示唆される。

以上のことより、家庭における性教育のあり方について、子どもと『性』について何かしら話をするきっかけづくりは、平日頃から子どもとの会話をもち、子どもにとって話がしやすい、相談のしやすい環境をつくることであり、そこから『性』についても話をする環境となりえると考えられる。話をしやすい環境は、子どもたちの『性』の問題について率直に話し合いができる場ともなるのである。親たちが『性』の問題について十分な知識をもち対応できるように、特に性行為に関する側面や心理学的側面について知識を習得していけるような支援が必要である。

まとめ

中学生の子どもをもつ両親とその子どもの会話について、会話の頻度と「子どもからの相談」、「子どもについての悩み」、「性」についての会話」について、以下のことがあきらかになった。

1. 子どもからなにかしらの相談を受けたとしたのは、「会話あり群」に有意に多かった。

2. 子どもについて悩みがあったとした親は、「会話あり群」と「会話なし群」でそれぞれ約6割を占めた。

3. 子どもについての悩みの内容は、「日常生活について」がほぼ半数を占め最も多かった。また、「性について」の悩みは、会話なし群に有意に多かった。

4. 「性」についての会話は、会話あり群の約9割の親が話をしていた。「二次性徴」や「月経」については、「会話あり群」「会話なし群」とも最も多く話しがされていた。

おわりに

今回の調査からは、親子間に会話があるということは、性についても話ができる環境となりえること。また、会話がある家庭においては、何かが起こった場合に相談ができる環境となりえるのではないかとということが示唆された。

今後の課題としては、対象となった親は母親が多かったため、父親も加え親の性別による検討が必要とされる。また、子どもの性別との関連についても検討を重ねることで、子どもたちとの関り方について性別に添った形で検討ができるものとする。

付記

本研究は青陵大学共同研究補助金（平成18年度）の助成を受けた。また、本稿の要旨は、第47回日本母性衛生学会で発表した。

引用・参考文献

- 1) 財団法人日本性教育協会．「若者の性」白書 - 第5回・青少年の性行動全国調査報告 - ．東京：(株)小学館；2001．
- 2) 石沢敦子、矢島まさえ、佐光恵子他．思春期における子どもの性教育のあり方(その1) - 中学校3年生の家庭における性教育の現状とその課題 - ．群馬パース学園短期大学紀要．2004；6(1)：3 - 11．
- 3) 齋藤益子、木村好秀、関島英子他．中学生をもつ親の性意識．思春期学．2004；22(2)：268 - 274．
- 4) 社団法人日本家族計画協会．男女の生活と意識に関する調査報告書 性に関する知識 意識 行動について．東京：社団法人日本家族計画協会；2003：32．
- 5) 本間裕子．家庭における性教育に関する文献検討．大阪府立看護大学紀要．2001；7(1)：91-98．
- 6) 山地佳代、白石裕子、松浦賢長．家庭における性教育の可能性に関する研究 - 女子高生とその母親との関係および性に性に関する会話についての

- 質問紙調査より - . 母性衛生 . 2002 ; 43 (4) : 549-554 .
- 7) 窪田和子 . 《特集 》いま、思春期の悩み 地域での対応 . 思春期学 . 2004 ; 22 (1) : 117 122 .
- 8) 北村邦夫 . 思春期の性の悩みとその対応 . 栃木県産婦人科医報 . 2003 ; 30 (1) : 61 69 .
- 9) 高橋久美子 . 中学生の父母はどう性教育をしているか - 親と子の認知の比較 - . 日本家政学会誌 . 1999 ; 50 (6) : 621 629 .
- 10) 親と子のコミュニケーション・スキル向上検討会 . 親と子のコミュニケーションブック . 東京 : 社団法人日本家族計画協会 ; 2004 : 5 .
- 11) 森田薫、斉藤益子、木村好秀 . 中学生の親の性知識に関する検討 - 講演前後の知識の変化 - . 思春期学会 . 2006 ; 24 (1) : 168 175 .